明治から三代続く野生美の職人

尼ヶ崎剥製標本社

左から遠藤秀紀教授、剥製標本社社長の兄の晴雪さん、ご長男の匠さん

日本の剥製標本の第一人者が弥生にいると聞いて、東京大学総合研究博物館の遠藤秀紀教授に案内を乞うた。言問通り沿いの路地を下ると目立たない看板で「有限会社尼ヶ崎剥製標本社」とある。

引き戸を開けるとたしかにある。ヒョウ、クズリ、ガゼル、そしてこれはハリセンボン？「いいやつはぜんぶ博物館に収めたので、ここに大したものはありません」というのは社長で剥製職人の尼ヶ崎研さん。言葉とは裏腹に、牙を剥くヒョウや枝に留まるフクロウは迫力満点。

創業は遠く明治にさかのぼる。初代社長は祖父の清太郎さん。日本橋の造り酒屋の息子で大酒呑みだったという。59歳で大往生し、そのあとを大正13年生まれの父親、興三さんが継いだ。遠藤先生が標本社を知ったのはこの二代目の時代。国立科学博物館の新宿分館で興三さんと会った。

二代目興三さん（撮影・立木義浩）

その第一印象は「怖いひと」。何を言っても聞いてくれない。「俺の創ったものに口出しするな」という感じだったらしい。「剥製職人はいわば芸術家」と遠藤先生。

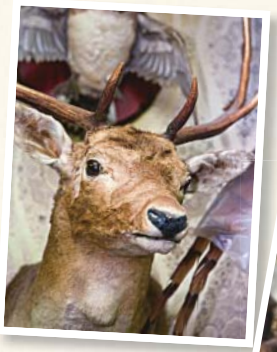
"The Owl of Minerva only takes flight at dusk."
The gaze was scary.

「無限の可能性のなかから、動物が最も輝いている一瞬を切り取って、それを永遠に残そうとする」。

５年前興三さんが亡くなり、以来、研さんが社長として会社の舵を取っている。「剥製で一番難しいところは？」と訊くと、即座に「革のなめし」と答えた。剥製技術は江戸時代からあるが、西欧の技には敵わない。むこうはもともと狩猟が盛んであるうえに、18世紀の王政や博物学が技術の発展を促した。ウマなどの革のなめしにその違いが出るという。

かといってこちらも研鑽を怠っているわけではない。「動物を見ると骨格や筋肉で見てしまいます」と研さんは笑う。残念なのは最近、教育的な剥製の仕事が増え、技を尽くして野生の美を追求する仕事が減ったことだ。

話の終わりに研さんに「写真を一枚」とお願いすると、あっさり断られた。これぞ職人気質。何度お願いしてもダメなので弱っていたら、お兄さんの晴雪さんと長男の匠さんが助けてくれた。



Information

◎お問い合わせ
尼ヶ崎剥製標本社
住所:東京都文京区弥生2-7-1
電話:03-3814-8874
FAX:03-3813-1426
e-mail: amahaku@sky.plala.or.jp